2. 対　　象

1975年11月～1978年10月の3年間に、国立大阪病院小児科（奈良医大小児科）遺伝相談外来を受診した血友病にかかわる36相談例中、妊婦に関する12例。

3. 結　　果

①すでに保因者であると診断されていた妊婦　7例。

遺伝相談の結果、妊娠継続したもの2例（1例は現在妊娠中、1例は女児を出産）。羊水検査による性別判定を希望したものは2例（妊娠16～18週に行った羊水穿刺・培養の結果1例は46XXで妊娠継続し、女児出産。1例は46、XYで希望にて人工妊娠中絶）。羊水検査を行うことなく人工妊娠中絶を行ったもの2例。羊水検査予定中に自然流産したもの1例。

②未だ保因者診断の行われていない血友病血族妊婦　3例。

遺伝相談の結果、妊娠継続したもの2例（1例は健康男児、1例は女児を出産）。他の1例は一旦人工妊娠中絶を行い、その後非妊娠時の凝血・免疫学的保因者診断にて「非保因者」と診断された。

③妊婦が血友病の妻　2例。

共にすでに男児あり。人工妊娠中絶をしたもの1例。羊水検査の結果46、XXのため人工妊娠中絶したもの1例。

4. 問　題　点

①羊水穿刺の長期的影響について追跡調査。②妊娠後の保因者診断法の検討。③保因者の遺伝相談医と接触させる最適年令の研究。④総合的な血友病遺伝相談の形式と質が配偶形式と血友病発生頻度へ与える影響。

などについてさらに研究を重ねねばならない。

体育と心理不適応

国立特殊教育総合研究所
永　峯　　博

§1. 学校に於ける体育の参加状況・欠席日数

学校に於けるトラブルと不理不適応度（母，子）を調査するために関東地区及び関西地区の小学校1～4年生を対象にアンケート調査を実施した。

＜アンケート調査＞　発送39　回収34

＜体育の参加状況＞　鉄棒、とび箱を除いては大体参加の傾向が見られた。又個人的にみると、参加しているものは殆んどの種目に参加し、参加しないものは全部参加しない傾向にある。

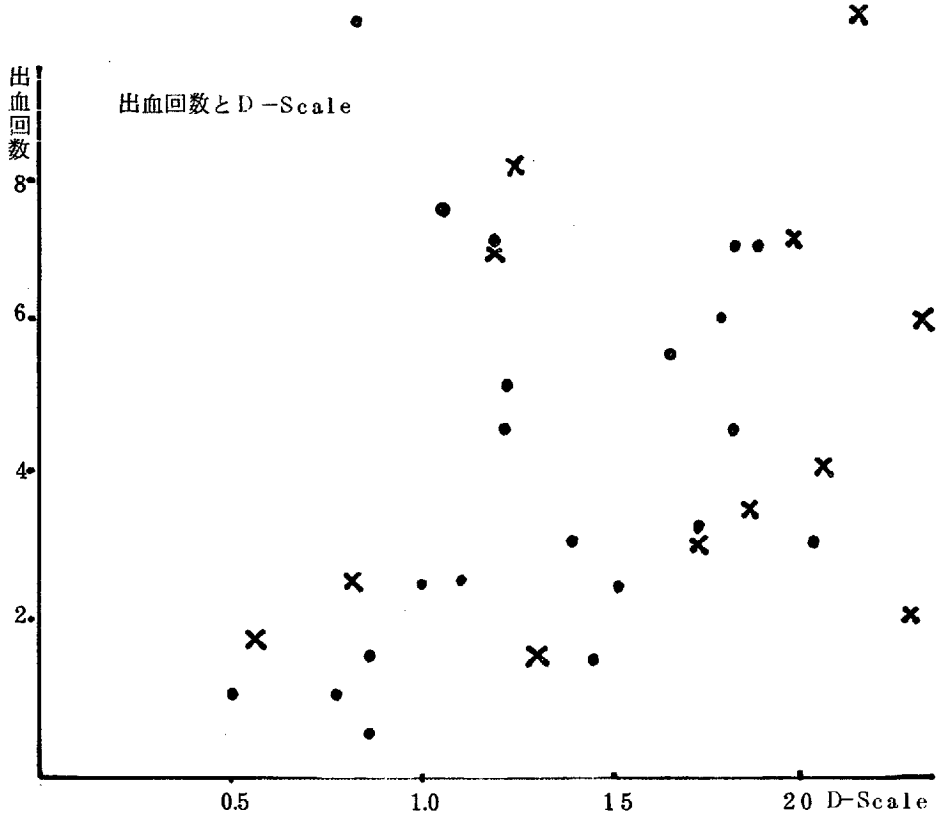
＜血友病児の自己概念＞　Self Differential Scale（鈴木）を使用し、血友病児及び母親を対象に現実像と理想像の差を調査し、適応度を求めたところ、不適応児が多かった。

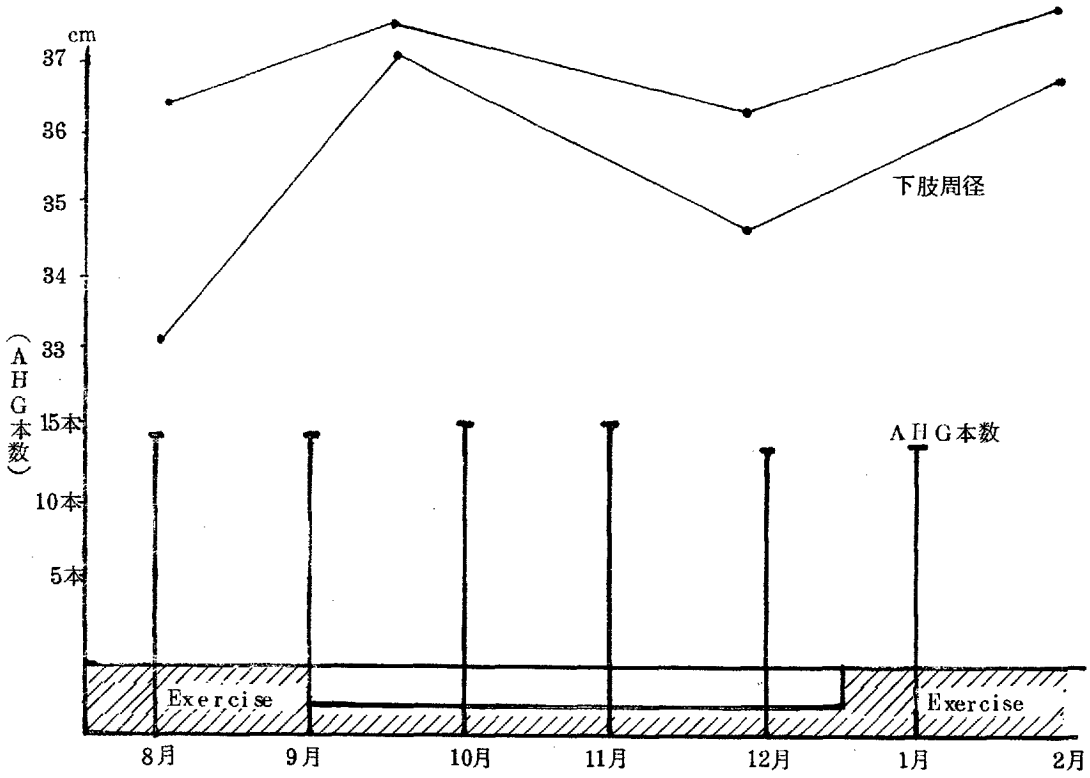
＜不適応度と出血回数＞　D－Scale に於ける不適応度と出血回数を比較すると、表の如くでやや相互間に関係があるように思われた。又学校に於けるトラブルのあるもの（表で×印）は不適応の程度の強いものに多い様に思われた。

§ 2.　Exercise と筋力、四肢周径

8月より2月まで、小学校4年生の血友病児を対象に、整形外科医の処方に従い運動のExercise を毎日実施し、之とAHGの使用本数を比べてみた。この6ヶ月間で大腿、下肢周径は徐々に増大している、筋力は五段階評定では明確な差は認められないが、感覚的には、筋力が増強しているように思われた。

AHGの使用本数は、Exercise による差は認められなかった。





血友病性関節症患児における装具療法の実態と止血効果について

神奈川県立こども医療センター
整形外科　井　沢　淑　郎

血友病性関節症に対する装具療法の効果については、既に再三報告して来たが、今回は装具装着の実態についてアンケート調査を行い、止血効果との関連について検討した。

対象は、現在膝及び足関節の関節症に対して装具療法施行中の患児で、回答を得たものは１側ＬＬＢ装着例７例、１側ＬＬＢ、他側ＳＬＢ併用例、ＳＬＢ装着例１２例（うち両側装着例６例）の計２１例（２９関節）であった。なお対象例の年令は平均8.8才、装具装着期間は平均１8.5カ月であった。

装具の装着状況をみると、ほぼ一日中、全面的に装着しているものは２１例中１２例（57.1％）で、装具の種類による差はみられなかった。

装具の装着を忌避する理由として、装具の重量も無視し得ない（特に靴型ＳＬＢは重いとするも

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

§1.学校に於ける体育の参加状況・欠席日数

学校に於けるトラブルと不理不適応度(母,子)を調査するために関東地区及び関西地区の小学校1〜4年生を対象にアンケート調査を実施した。